

## 昭和三陸大津波来襲時の人間行動

首藤 伸夫

### 1. はじめに

昭和 8 年 3 月 3 日午前 2 時 32 分頃、北は千島、北海道、東北地方、関東地域全般、本州中部地方の大半より近畿地方にわたり、人が感ずる程の大規模な地震があった。全国各地の地方測候所などから電信で寄せられた情報から、中央気象台では震源は釜石東方、震源の深さは数キロと概算した。

約 30 分後、東北地方の各地に津波が来襲した。この津波での犠牲者は 3 千人以上にも達する。

37 年前、明治三陸大津波で 2 万 2 千と云われる犠牲者を出した同地方で、なぜ又も大惨事となったのか。避難をしない人にはそれなりの理由があり、避難の遅れた人にも原因がある。一方、警戒に当たり、警報を出し、それが避難につながった例は多い。当時の記録から、その朝の人間行動を見ることとする。

### 2. 避難しなかった理由

#### 2-1 無経験

他国から来た人々の多くは、地震と津波の関連を知らず逃げ遅れた。代表的なものに「又大槌川筋に於て七、八百米上流に目下土木工事中の庭あり。此處に働く人夫は附近山際に沿つてバラツクを造り居住し居りたるも今回の津浪にて全部流失し十數名一人も残らず死亡せり。目撃者の談に依れば地震の際一度起きたるらしく燈火見へたるも町より叫びたる津浪襲來の聲は大槌川に遮られて聞へず再び寝に就きたる間に済はれたりと。」(辻)云われている。

沿岸に住み着きながら、津波の知識を持たない人も居た。やはり他国から来た人々である。

#### 「釜石

釜石町被害區域は第二圖に示す如く須賀海岸通りにては釜石灣港修築公營事務所、水産倉庫を始め、住家等約百五十棟は第一回目の激浪にて一呑に海底に漬はれ、礎石砂に埋まり、柱數片海濱に散乱するのみ。綺麗な砂濱となり此庭に住宅があつたのかと疑はれる位なり。而して多くは他縣人なりし爲め津浪の経験なく避難せざりし爲め多數の死者を出せりと云ふ。」(辻)。(付録 1 参照)。

明治の津波で大災害にあいながら、昭和でも大災害となった岩手県両石、姉吉、唐丹本郷などは、明治被災後の集落再建に際して、他地方出身者を家の跡継ぎとしたが、そのときに津波哀話のみ引継ぎ、地震と津波の知識を受け継いでいなかった。折角集落を高所に再建したにも関わらず、日常生活の便のみから低地に戻り、今回も全滅に近い被害を蒙ったのである。(山口、付録 2 及び 3 参照)

#### 2-2 肉体疲労

津波前の大漁が被災の遠因となった。宮城県牡鹿町の太平洋岸駆の浦湾奥に位置する谷川では

「(1) 谷川 津浪の高さは一丈六尺(四・八米)もあつて、死者二十三名も出した、第一回の浪が最も強烈で之によつて流されたのである。津浪は地震後三十分程経て來たのであるが、斯く多くの死者を出した一つの原因是津浪前一ヶ月にも瓦り鰯の大漁で夜遅く迄働き、體が非常に疲労して居つた爲、地震後來るかも知れぬ津浪に對し注意を缺いた故であると村民で語つてゐる者もあつた。」(鷺坂)

#### 2-3 誤った思い込み

##### (1) 僅かな経験

明治三陸大津波の後に出来上がった思い込

みがある。宮城県桃生郡雄勝町周辺では、明治二十九年は震度 2 程度であったが、津波は荒屋敷 8.8 m、雄勝 3.1m と大きかった。その翌年、明治三十年二月の地震は雄勝で震度 5 ~ 6 だったが、津波は 1m 程度で小さかった。そこで、地震が小さければ津波が大きい、地震が大きければ津波は小さいとの思い込みが生じていた。そのため

「荒屋敷 明治二十九年の三陸津浪の翌年も亦前年より強き地震あり良く記憶に新たなるを以て又津浪襲来かと部落民は戸外に出でしに何等津浪襲来なき故、地震強ければ津浪は伴はぬものと早合点して、今回の如き悲惨を見たり。」(石巻測候所)。

ここは、外洋に面しており、被害が大きく、死者二十四名、行衛不明三十五名、負傷者三十八名を出している。波の高さは約三十尺である。(国富・竹花、付録 4 参照)。

「雄勝 明治二十九年の津浪の時地震は長かったが小さかった。然るに今回のは遙かに強かった強震には津浪なしと思ひて波に済む。」(国富・竹花) と云う結果となった。

また、津波の襲来が明治三陸大津波より時間がかかったための油断も生じた。宮城県牡鹿半島では

「(2) 寄磯 此の地に現住する鈴木氏から聞いた事を記せば次の如くである、可なり強い長い地震があつた後三十分を経過したが津浪は來なかつた故、明治二十九年の経験から最早津浪は來ぬものとして寝についた所、間もなく襲来した。大きいのは一回で高さは五六尺 (一・六米) 位であつて小舟が流された位で殆んど被害はなかつた。又地震後津浪に用心して誰もが外に注意してゐたが、光や音は見聞しなかつたとの事である。尚前網も同様であつたといふ。」(鷺坂)。

同様の判断は北上川河口の追波湾沿岸雄勝町名振でも生じた。(鷺坂、付録 5 参照)。

明治の経験が別の形で仇となったのが宮城県雄勝町雄勝にあった。家に居た方が流されないと信じたのである。

## 「(6) 雄勝 . . . . .

次に此處の小學校は明治二十九年の時の津浪を標準にして建築したものであつて、今後津浪があつても校庭迄は上らないだらうとの見込であつたが、今回は校庭の上へ四尺も昇つて二三十噸もある船が押し上げられた。

此の村落では地震によつて津浪を豫測し高所に避難して居つたため多數の流失家屋があつたのに反して僅かに九人の死者を出したのみである。此處に注意すべき一つの話しがある、即ち某家では明治二十九年の津浪の時に逃げたため、其の際小供を浪に奪はれた、其處で今度は逃げない事にして家に居つた處が家ごと流された、其の家に居つた人達の中、泳ぎの出来る二人の男は助かる事が出来、又泳ぎの出来ない一人の支那人は屋根を破つて救助を求めて居つたが遂に助けられた、他のものは皆死んで仕舞つた。雄勝での死者は殆んど全部が此の家に居つた者であるといふ。」(鷺坂、付録 6 参照)。

## (2) 慣れ

広田湾に面する岩手県広田町の泊では「此の部落の人々は地震の爲一時戸外に跳出したさうであるが其後何れも大した事はなかつた爲再び家に入り床に就いた人が多かつた様である。津浪襲來の警告を聞いても起きないで遂にそのまま死んだ人が三名もあるとの事であつた。此邊では昨年頃より津浪が来ると言ふ事が頻りに言ひ傳へられて居つたので地震ある毎に警戒をして居つたさうであるが中には何時もの事の様に思つて油斷して居つたものも少なくなかつた様である。」(古館、付録 7 参照)

## (3) 根拠不明の思い込み

1) 寒いときには津波はない。

宮城県牡鹿町鮫の浦では

「地震では被害はなかつたが之に依つて津浪の襲來を用心して居つた者は子供迄も助かつたが、寒い時には津浪は來ないと考へ油斷して居つた者が多く流された。」(鷺坂、付録 8 参照)。

追波湾の船越でも

「地震では建築物には少しの被害もなく棚のものさへ落ちなかつたが、只餘りに長く震動してゐたから或は津浪の前兆かと一度は多くの者が高所へ逃げたのであるが中々津浪は來ない、又寒い時には津浪は來ないといふ考へをもつて居るものがあつて逃げたものの中三分の一位家へかへつて仕舞つた、間もなく津浪が襲來し、其の人達は水にぬれて、第一の波の引けるのを待つて逃げる事が出來た。」(鷺坂、付録9参照)。

## 2) 晴天・満潮に津波なし

岩手県唐丹本郷では

「遭難者の談によると

本郷にては、あの大地震の際不安を感じ、家財を背負いて高台へ逃れしも一度家へ來たりし時、古老曰く『晴天に然も満潮時に津浪来るものにあらず』と頑迷なる言に依り安心をなし床にもぐりしと。」(佐々木、18)。

## 3) 夜には津波はない。

青森県三沢村では

「三沢村

砂森。地震の強きに驚きたるを五分位にて止み然して止みたる直後一回雷の如き音と光あり其より三十分位にして海嘯の襲來あり、父より津浪と言ふものは夜は無きものと聞かされ居りし故今回の地震が津浪を伴ふ等は考へられず。打寄する浪の音によりて津浪を知れり。潮の高さは判明せざるもの真黒となりて盛上り波の前に砂をまくり立てて來れりとのことで最も大なる浪は汀より四丁位押寄せたり明治二十九年の津浪に比し同じ程度ならんとのことで僅少なるも五住家に浸水し、船小屋一軒破損せりこの海岸には明治二十九年迄は汀近く迄草茂れるも海嘯後枯死せりとのことなり(立花徳次郎氏五十三歳談)。」(青森測候所)。

## 4) 神頼み

岩手県大槌のことであるが、

「第十四項 海嘯哀話 其の二

(吉里吉里) 同村の三浦種吉氏は熱心な法華信者であるが津浪が起るや部落の人々の逃げ騒ぐを外に南無妙法蓮華経とやつたが御利益がない為か五十八才を一期としてあの世に行つて終つた(岩手日報所載)」(大槌海嘯略誌、42)。

## 5) 自分勝手な思い込み

当時大槌水産専修学校前期二年生であった16歳の少年の記録がある。それによると、「此の家族はすぐ目の前には、大槌川の川水と大槌湾の海潮とが相交錯していて且つ避難に不便で、死人を数人出した安渡川口に住んでいた。

『津浪なぞ人間一代に二度も来るものか』

あの猛烈な地震に反射的に起された一家五人、寒さにふるへ乍らも父に津浪襲来のことを尋ねた。然し五十二才の父は皆に斯う言つて安心させながら寝せたのである。」(大槌海嘯略誌、36)。

ただし、この少年は気がかりなため、ズボンをはき上着を着たまま床に入り、眠れなかつた。そのうち、家の前の川で水が音を立てて引き始め、川向こうで騒ぐ声が聞こえてきた。これが引き金となって家族一同避難する。母は一旦水にさらわれたが、木につかまつて助かった、と云う経験をした。

## 3. 避難開始のきっかけ

### 3-1 警戒と警告

各地で津波を警戒する人が居た。

釜石町では、

「釜石

町民中に前津浪に経験ある者あり。強震後若しや又津浪が来るのではないかとの懸念を抱き三々伍々海濱に集まり、引き潮無きやに注意したりと云ふ。」その後「普通の海鳴りとは異りたるを以て不安に思ひ居たるところ數分後にして海水の急速に減退するを認めたと云ふ。目撃者の談に依ると減水程度は棧橋の始んど先端迄(百六十間)減水したりと云ふ。

水深二米内外のものと推定す。すわ！！津浪襲来！！警鐘を亂打して町績き後方の裏山へ着のみ着の儘我先きと避難したりと云ふ。逃げおくれたる者乃至は一旦避難して再度我家へ引き返し者又は最初より軽視して逃げなかつた者が災厄にかかつて居る。」(辻)。

また、漁業者の

「津田徳三郎氏 (漁業家)

氏は地震直後津波の予感をいたき尾崎神社裏手海岸に焚火をなして警戒に余念なかつた。相当時間経過したため人々は津波襲来せぬものと帰った者さへあったが氏は地震の具合からどうしても事変の予感を去ることが出来ずそのまま火の明にて海を警戒せしに間もなく引水するを発見しすは一大事と津波襲来を付近一帯に急報し直ちに避難した。此の辺は被害の中心地にして又避難に不便な場所であるにもかかはらず死傷者ながらしめたことは大なる功績といはねばならない。」(三陸大海嘯記録, 40)。

地震後に海を警戒した人は他にも数多い。(付録 10, 11, 12, 13 参照)。しかしながら、これらの人からの警告が正しく理解されなかつた事態も発生した。

「唐桑村字小鰐浦部部落総戸数六十三戸中流失家屋二十九戸、浸水家屋十戸、死者八名、行方不明者七名、負傷二名、同所には大洋丸

(80頓) 不動丸 (63頓) 松生丸 (40頓) の三艘が海岸に押し上げられ、家屋の破片は湾内に充满し殆ど海面と陸地とを区別し得ざる惨状を呈した。

同部落民中強震後間もなく一時に干潮になり海嘯の前兆なることを知り、小高き丘に上がり部落民に津浪だ津浪だと告げたが火事と間違ひ逃げおくれ死傷したものもある」(三陸大震災史, 36 ~ 39)。

同じく大船渡の盛では、

「大船渡

盛町で津浪の襲來のあつた事を知つたのは餘程の後の事で其爲警鐘なども餘程後れて亂打したが何んの爲に警鐘を打つたか暫く解らんで居つた人が多かつた。」(古館)。

ここは、1960 年のチリ津波でもサイレンの意味が判らず、多数の死者が生じた。

その大船渡でも成功したのは、口頭での警告が伴つた場合である。

「六 大船渡町 大船渡町にては大津波に百戸も倒壊して僅かに死者二名負傷者一名に止めしはこれ消防組所属木下清之丞氏伊藤金三郎氏木下信次郎氏及川栄助氏の必死の努力によるものなりき、丁度其の時夜警当直勤務中なりしが地震と共に番小屋を飛出し浜育ちの第六感より津波襲来と直感し延々一里に余る長き町を端より端まで鈴を振りつつ各戸をたたき避難するやう警告をなし回れるを以て全町民小高き丘の上に無事避難することを得たりと」(気仙郡海嘯誌, 7)。

海上の船からの警告と思われるものもあつた。

田老村では

「木村チヨさん (当時 11 歳) 談・・・・向かいの玉沢徳之助さんの所では、おじいさんは宮司だったこの人が、汽笛が鳴ったのを聞いて津波だと想い、帳簿を全部と金を背負って逃げた。あと一人、虎八屋の若いものは船の免許を取つていて、汽笛は津波を知らせる音だと言つてみんなを逃がし、さらに佐々木とうお医者さんの所にも行って、『津波が来つから逃げろ』と教えた。

私も汽笛が鳴ったのを覚えている。ボーボーと長く鳴つた。知識のある人は、その汽笛を聞いて津波だと察知し、早く逃げた。」(田老町史津波編, 164)。

### 3-2 電話による情報伝達

#### (1) 大槌電話局からの発信

大槌電話局から山田及び釜石の電話局へ急報が入り、避難開始に役立つてゐる。

「大槌郵便局の交換手通信大臣から表彰。

大槌町郵便局交換手佐藤ひめさん (22) は今回の津波に於て真先に之を山田、釜石の郵便局に知らしめた。これに依つて山田、釜石の交換手は驚き夫々町内の重なる箇所に知らしめたので町民はそれ津浪とばかりに避難し

たのである。山田は被害の多い割合に死亡者が少なかったのは此のおかげであると言はれる。ひめさんは其の功に依って遞信大臣から表彰されることになった。女子にして遞信大臣から表彰を受けたことは無上の名誉と言はねばならぬ。」(三陸沿岸大海嘯印象記、95～96)。

## (2) 山田町の場合

これをうけて山田町では、  
「町を救ふた山田町の交換嬢

死者八名の内最も可愛想なのは山田郵便局の殊勲の交換嬢沼崎ちえ子さん(21)の家族で兄の海産物商熊太郎(31)は中風で臥床中の父松蔵氏を背負って境田の自宅から山の手方面へ逃げ出す途中で水魔に呑まれてしまひ、更に熊太郎長男熊次(6)は津浪と同時に行方不明となった。それにもかゝらず沼崎さんは町の人々のために他の局員と共に郵便局付近に水が来るまで通信連絡のために働いた。初め此の夜の当直の沼崎ちえさん湊つちさん(29)内館あきさん(20)の三人は大槌局から津浪襲來の電話を受けるや之を機敏に町内電話のある家々に急告したので町民はそれ『津浪だ』とばかりにはね起き龍昌寺、八幡神社境内山の方面に避難することを得た。山田町は被害程度の多い割合に死亡者の少なかつたのはこの三人の犠牲的行動をなした交換嬢のおかげであると町民から感謝されてゐる。)(三陸沿岸大海嘩印象記、96)。

山田町からの電話が伝わった先では、  
「船越村漁業組合の使丁金沢清吉君(22)は、津波の当夜、前須賀海岸の事務所に就寝中、山田郵便局から津浪が来ると言う電話があつたので、直ちに田の浜及び大浦部落に特設の私設電話で某旨を急報した後、就寝中の付近民家へ避難するよう警告を与え、自分は一物も携えず最後に避難した。同部落が百八十余戸を流失したのに死者は僅かに一名に止まつたのは、金澤君の機敏な行動に依るものと賞賛されている。(岩手県昭和震災誌)」(山田町津波誌、348)。

## (3) 釜石町の場合

「津波美談

一、釜石郵便局電話交換手の人々

鎌田ハル子　伊藤ヒサノ　宮館トシ  
佐藤ユキ　佐藤ミワ　千井タカ

以上六名の人々は当日夜勤当直であつて地震と共に各方面から問ひを受けている折から大槌からの津波襲來の急報に接しこれ一大事と直ちに町内各方面にそのことを急報し避難を容易ならしめた。間もなく津波襲來せるも自分等は避難せず室にふみ止り各方面との連絡応報に身も家も忘れて最後まで活躍したことは女子として誠に健気な行動にして各方面から激賞せられている。

此の貴き働きが東京の最初の号外に報ぜられ更に新聞に雑誌に掲載された尚安光仙台通信局長は表彰内定をした。

この情報は同日の宿直員は六名で地震があつてから十分たつて釜石から三里北の大槌町から津浪が来たとの電話が入り、これを直ちに消防組警察に急報し警察消防組は警鐘を乱打して町民に伝えられ避難に役立った。

(三陸大震災史、115-116)。

この情報は、警鐘やポンプ車巡回によって住民へ伝えられた。

「釜石町

二、同町役場某氏の談に依ると地震後十分餘に大砲の様な音が聞へ、其の三四分後に電話で大槌が津浪との報に接し、警鐘を亂打し、多數の人々は高處に避難することが出来た。」

(本多)

或いは、

「五 釜石常備消防

高橋千治　高橋信幸　長澤一郎　菊池甚之助　大和田宇之吉　岩間栄太郎　之諸氏

諸氏は潮水引くを見るや直ちに警鐘を乱打しつつ津波の襲來を町民に知らせ尚自動車ポンプを以て町内を巡り警告せり。此の警鐘が全町に響き渡り地震後再び寝についた人々もはね起きたために避難に好都合を与へたり」と記録されている。(三陸大海嘩記録、40)。

## (4) 海上船舶などへの連絡

「二 岩手県水産試験場無電技師 宇佐美  
敏男氏

氏は津波襲来を知るや直ちに無電室に入り各方面に対し津波襲来の警告を発した。之がため沖合出漁中の漁船並に航海中の汽船は勿論落合銚子の無電局に達し為めに東京其他遠方に敏速に報ずることが出来救済応接等急速に受けることを得たことは大なる功績と云はねばならぬ。

宇佐美氏のかかる犠牲的活動に対する内助の功を忘れる事は出来ない。それはきみ子夫人で津波襲来するや夫が無電室に入ると同時に戸口に立って幾回となく襲ふ津波の増水に腰までも水に浸かりながら夫を激励し安心せしめて其の仕事を完成させたと云ふ。此の健気な働きは新聞や雑誌等にて激賞せられた。」(三陸大海嘯誌, 38 ~ 39)。

## 3-3 異状確認と避難

異常な引潮は各地で津波のきっかけとなっている。岩手県唐丹本郷では、警告を発した人は命を失った。

「本郷部落は本郡被害区域の最も慘たる地点なり、海岸一帯を見渡すに破片木材散乱し九十戸余りの部落は今見る影もなし、佐久間市藏氏及北村三内氏は強震後海水の異常に引けるを認め津波襲来の兆と知り部落を駆巡り『津波だ逃げろ』と急を告げ渡り部落民を全部避難せしめて後自分等は逃げんとせり、然るに噫此の二人共逃げ後れ遂に幽明塚を異にせりとは。謹んで二氏の靈を悼む、『津波だ逃げろ』の声を聞き多くの人々は稍高所にある社(アンバ様)に通ずる巾二尺余の小路に避難せり、然るにその先に立てる某躊躇倒れたり、其の後に来る者続いて皆倒れ深夜の事とて皆あわてふためきたり、此の時にあたり大波來り此の混乱せる群衆を一挙にして海中に運び去れりと、また部落の奥なる桐畠部分に避難せる多数の人々は是又大波にさらわれたりと、故に九十戸許の小部落なるに溺死者三百余名の多きに達せり、」(気仙郡海嘗誌, 5) (付録 14, 15, 16 参照)。

宮城県歌津郡伊里前では、音響と津波の形とが判断の基となっている。

## 「伊里前

二時半頃地震ありしが當部落民は地震のみと思ひ間もなく寝につきしが約三十分位して沖の方でゴーゴーと言ふ音聞き部落民は堤防に上つて(幅二間餘)沖を見たるに島附近に幕を張りし如くにして津浪襲來を見直ちに取るものも取り敢へず丘の學校に避難せし爲人命に損傷なし。」(石巻測候所)。

音響を津波來襲と結びつけたのはあちこちで見られるが、青森県では「シヤシヤシヤ」などと表現されている。なお、津波先端は左程高くはないが碎波していたと見え、「先端白色となりて海面は可なり明るく」、「音響を伴ひ津浪の先端は白光となって折れ返り」などと表現されている。例えは、

## 「八戸市鮫町

津浪の最も察知したるは山付の高臺に住居する人々にして之等は汀邊に住む人々より早く異常音響を聞きて沿岸居住者に津浪來襲を知らせたりと言ふ。(水産學校宮崎氏談)。(青森測候所)。(付録 17, 18 参照)。

折角の異常音を聞きながら、避難にはつながらなかった例もある。青森県三沢村五川目では、

「鷹架石太郎氏(六十七歳)の談に依れば餘りに地震に強く少時起床したるも寒氣厳しきため地震の止む共に就寝寝せしに二三十分钟后大砲の如き音響を聞き稻妻と思はるる光を見たるも津浪の襲來する等は氣付かざりしが「ジャジャヤ」と言ふ波の音に初めて津浪ならむと思ひ飛び出したる時は就に潮は家の前迄押寄せたるも屋内には浸水せざる程度にて其後は弱き潮のみにて家屋に達するに至らずして止みたり。」(青森測候所 2)。

## 3-4 船の異状体験と警告

「農林省監視船の偉大な功績 機敏な処置で女川の人畜被害を免る

牡鹿郡女川港の津波による被害は軒並に床上

三四尺以上襲はれ家屋倒壊九戸を出だし運送船漁船等で護岸上に揚げられたもの多く慘状を極めたが人畜に死傷のなかつたことは意外とされてゐる。

それは当時被害の最も大きい鶴の神海岸近くに農林省漁業監視船新知丸が碇泊してたが地震による波濤が烈しく『ドン』と船底に一大衝動を与へ船長以下はこの強いショックを異常に感じテッキリ船底に一大衝動を与へる位の地震では津浪が襲来するかもしれないといふ予感と推測から直ちに海岸近くにあった船に銅鑼を鳴らして予告しながら湾外に碇泊した。一方この非常合図によって及川部長菅原巡查は海岸に面した各戸に対し予め警戒を与へたのでいづれも突嗟の間に万一に備へるところあつたので幸ひ流失する位の強烈な襲来でなかつたにしてもあれだけの被害をうけながら人畜に死傷を出さなかつたのであらうといふので女川町民を最大の被害から救つたのは新知丸の鋭敏な処置のお蔭であると専ら評判されてゐる。」(河北新報、昭和8年3月8日8面)。

### 3-5 訓練の成果(?)

「山田町役場當局の言ふが如く町民の統一訓練の宜しきを得てか流失家屋二六六戸倒壊家屋五九戸に比し人命の損失少なく僅かに死者七名行衛不明一名を出したるは不幸中の幸と稱すべきなり。」(二宮)と記録され、あたかも平常から避難訓練でもあつたかのような印象を受けるが、3-2で先述したように、情報が旨く伝わつたからと考えた方が良さそうである。統一訓練などが行われて居たとの記録は、今の所発見されて居ない。

## 4. 立ち戻りや避難遅れ

### 4-1 帰り寝

一旦避難したにもかかわらず、また立ち止まって就寝した例は各地に見られる。

釜石では

「時は三月三日午前二時三十一分頃。突如として、近來稀なる強震に襲れた。時ならぬ激

動に見舞れて深夜のまどかな夢を破られた町民は、老若男女を問はず戸外に飛び出した。地鳴りと家屋の動搖に伴ふ響には一種異様な不気味さを孕んでいた。我を忘れて戸外に飛び出た町民はわなわなとふるえ、全町は一時にざわつき出した。しかし、この上下動の強震も約二分にして止んだ。幸にして家屋の倒壊もなく被害の見るべきものとてはなかつたが、時計の振動は止り、棚上の器具等が落下した程であった。被害の少なかつたことに安堵の胸を撫で下した町民は、無事をささやきながら、再び寝についた。

それより約五分。再び、より激しい強震が襲來した。二度の強震に全町は再び騒然として沸立った。かつて明治廿九年の三陸大海嘯に痛い経験を嘗めた町民は、期せずして海嘯來の不吉の予感に襲はれた。当時にしてみれば氣の早い者、今にしてみれば用意周到な一部の人は、すは海嘯來と、取るものもとりあへず、避難していた。しかし極めて一小部分の人々であり、他は皆半信半疑の内に警報をまっていた。・・・・・

今にしてみれば、再度の強震こそは全く異常な響き方であった。沖の方より何やら大地をゆすぶって陣地に迫りつつあるかの感はあつた。その強震の終ると思ふ頃、沖の方と覚しき方角に、大砲の轟音ともつかず、落雷の響きともつかぬ一大音響をきいた。或者は、沖の方に当つて稻妻の如き一大閃光を見たといふ。かく全町の騒然たる中に、殊にも海岸地帶の者は海辺に火を焚き万一を警戒しつつ海面を注視して潮の変化如何を不安の中に見守つた。しかし、かなりの時(約二十分)を経ても海面は何等の異状をも呈さなかつた。これに安心したか、中には再び帶を解いて寝に就いた者も少なくなかった。」(三陸大海嘩記録、3-4)。

そして数分後、大津波が来襲したのである。

田老や、その近くの小本でも、  
「田中ミヤさん(当時十二歳)談・・・・  
はあはあ。おれはねんす、おらが父親はすう、  
明治二十九年の津波に遭っている人だった

の。それで地震が揺った時、全然寝ながつた訳。それでおらが家の前に井戸があったの。それを水が引けないか一生懸命見てだったの。『津波が来る時は井戸の水が引けるずうもんだけ』ってね。そうしているうちに『寝ろおー』ずうもんだからはれ、一応寝だ訳だ。そうしたところがら『津波だが、逃げろー』ってこうほれ、外から父親の声が。ほほほ」(田老町史津波編, 79)。

「箱石哲平さん（当時小学 6 年生）談……いや、こういう誤解があったんです。津波の時は、必ず井戸の水がなくなる。度胸のいい人達は井戸の水を見て、『関係ない、これで大丈夫だ』という事で誤った。むしろ小本の場合は、豪傑がどうばかりやられたんです。走るに遅いのが、先に逃げたんです。ところが豪傑がどうは、『大丈夫だあ』って寝てしまつた訳です。一家全滅は、大概そういう所です。おっかながってる人達は、皆逃げた。」(田老町史津波編, 69) のように、豪胆な人ほど遭難した。

#### 宮城県でも

「鮫の浦灣 鮫の浦灣は深く東から西へ灣入して北に寄磯の岬突出して女川灣を畫し灣の西端中央に大谷川の部落と其の南隅に谷川と北隅に鮫の浦の兩部落が位置してゐる、そしてその灣口は直ちに外洋に開いてゐる此の方面では最も被害の甚大な部分である。

谷川は戸數約六十七戸の一漁村部落である又鮫の浦とても之に半する小漁村部落である。鮫の浦と同様谷川も此の地震で一度起き上つた人々が再び寝てしまつたこれが殆んど全滅程度の此の悲惨を招いた第一の原因であつたことは衆人皆之を認めてゐる。寝て間もなく第一回目の津浪が襲來し、この瞬間谷川も鮫の浦も一朝にして殆んど全滅してしまつたが誰一人としてこの部落の人は其の後の津浪の模様を知る者がない。話を聞いても皆始めから押し上つて來た浪に呑まれてしまつたと考えてゐる。」(石巻測候所)。

#### 青森県でも、

#### 「三沢村の悲話

#### 寝入りばなへ来た津浪 一度は避難したが大丈夫と帰った処へ

今回の津浪で三沢村三川目、四川目の部落が廿余名の死者を出し最も被害を受けた理由は地震と共に住民は一旦丘の上国道筋に避難し津浪の襲来を避けたが暫く経っても何の変化も見せないので大丈夫と思って再び家に帰り就寝した為に完全に寝入りばなを襲はれ逃げる暇もなく遭難したもので同地方をと沿った波浪の高さは一丈五尺余もあったと罹災者が語つてゐる……」(東奥日報、昭和 8 年 3 月 5 日 2 面)。

#### 4-2 財産など

財産などを持ち出すために時間がかかったり、取りに戻つたりと云う行動が死につながつた。

#### 岩手県陸前高田町で、

「(高田町にて佐々木特派員) 気仙郡広田村は被害少なからず倒壊戸数百五十戸を越え之等は全部木端微塵に打ちひしがれ死者四十六名を出した命からがら広田村から高田町に避難して來た宮古町鍬が崎魚商本田政之助氏は其の夜の惨状を語る

私は橋本旅館の二階に泊つてゐたが昨夜二時半頃凄い地震に驚いて起きた然し地震が鎮まってから又床についた所三十分も経つか経たない所に津波だと云ふので飛出して助かつた惨死した人々の中には随分金をとりに帰つて金を抱いた儘しんだものが多かったと云ふ銀行の破綻から金を家に置いたのでこれ等の災難を招いたのだと云はれてゐる。」(岩手日報昭和 8 年 3 月 4 日 3 面。)

このころ、1929 年 10 月に始まった金融危機の影響が収まつていなかつたようである。

岩手日報昭和 8 年 3 月 3 日 2 面には「米国銀行動搖拡大 休業銀行相次ぐ」の文字が躍り、岩手日報昭和 8 年 3 月 4 日 4 面には「…而も岩手県は凶作につぐに凶作を以てし、それに一昨年より銀行破綻に遭遇して而も休銀の整理案が一も出来上つて居らないのである。

全国最悪の岩手県である処に又この大災厄である。岩手県は全く息の根を留められたと云つてもいゝのである。」との記事がある。

「宮城県本吉郡唐桑村只越部落の人達、グラグラッとあの大揺れに夜更の夢をやぶられたがいつとはなしにきかされていた古者の言葉がピンと頭に来てその後に襲い来る恐ろしいものを予期して一同逃げ始めたが部落切っての素封家の予七爺さんは地震直後浜辺まで出て見て大丈夫と思ったが一人家に戻り重要書類とかシコタマ現ナマを持って逃げんとするところをドドーッと来た大津波にのまれておだ仏黄金と心中した訳だ。」(三陸大震災史, 110)。

証文探しが命取りとなり、先に逃げた子供二人が残された悲劇は、田老町で生じた。

「木村チヨさん（当時十一歳）談

●家から逃げる時は、早い遅いの違いで二人は助かったけど、あの家族は亡くなったんですね。

チヨさん 父は何ぼか財産があったから、二階に上がって、おじいさんに『証書はどこにあるー?』『証文はどこにあるー?』と言って、箪笥を開ける音まで聞いたの、私は。その時、おばあさんが下に居て『チヨ、お前達は先に逃げろ』と言った。きついおばあさんだったから、たまげて兄と二人手を繋いで逃げた。」(田老町史津波編, 166)。

戻らないまでも、避難速度が落ち、遭難した。岩手県現大船渡市末崎町で、

「気仙郡末崎村船川原の部落民は、津浪という声に老幼を労りながら我勝ちに安全な場所へと避難した。其の人々の後から 20 才位の娘と 6, 7 人の若い衆とが一団となって続いたが途中娘はふと立ち止まって若者達を顧み、『お前達、お金持って来たの! 家が流されてもお金さへあれば・・・』とフトコロに手を当てて眉をひそめた。若者達は娘の道理ある言葉に『うん、それもそうだな。が若しその中に津浪が・・・』とやゝちゅうちょしてい

る所へ、ドッと津浪が寄せて来て、娘も若者もたちまち漬はれてしまった。」(岩手県昭和震災誌, 1188)。

持ち出そうとするのは、財産だけではない。

宮城県雄勝町では、

「全滅となった荒浜の隣部落女荒部落で押流されて死んだ中には氣の毒なものが多い、ことに津浪とときて一時安全地帯に逃れた高橋正治さんは、家に残した祖先の位牌を持ち出さぬのが残念だと再び自宅に引き返したまま帰って来なかつた。」(河北新報、昭和 8 年 3 月 9 日 8 面)。

持ち出しを、不思議な声の御蔭で取りやめた例がある。

「川上ミヨさん（当時 5 歳）談・・・

後でキミさんに聞いた話であるが、三月一日、津波の前におじいさんが亡くなつたので、父母と私の三人は鍬ヶ崎に行き、田老の家にはキミさんが一人で留守番をしていた。家の父は私達（キミさんにも）『何かあつ時は、大事なものは持って逃げんだがよ』と言っていた。

キミさんは、地震がして津波だというので一旦は逃げたが、常日頃言われている主人の言葉を思い出し家に戻った。玄関に入った。そしたら、仮壇のほうから『それは置いて逃げろ』という声がしたので、慌ててそれらを置いて逃げた。

赤沼山にたどり着いた時に波に足を洗われた。はあ、駄目だと思った。その時、幸運なことに木の枝がぶら下がっていたので、それにとつついだ。波がひけていってから、赤沼山に上がっていった。」(田老町史津波編, 159-160)。

持ち出しを他人から強制的に止めさせられたのは、

「唐丹村 唐丹村は純然たる漁村にして・・・荒川部落の海岸低地にありし部落は全部流失せり津波襲来せんとするや『津波だ逃げろ』の声と共に大抵避難せり。某女は金を持ち出

さんとしてもじもじし居れり。之を見たる隣のお爺さん來り『津波だ逃げろ』と木の棒を以て其の女を打ち後より押し追ひ立てて避難せしめ助かるを得たりと。」（気仙郡海嘯誌、4）。

立ち戻っても幸いにして怪我に止まった例もある。岩手県田老町で、

「母が怪我した経緯は、いったん避難したが、津波で避難すると食べる物がないと思い、又家に引き返し、作ってあった三日餅を小さな籠に詰めて、姉キヌとその籠を背負って逃げた。竹藪の所の崖っぷちで上れず籠にしがみついていたら、飛んで来たトタン屋根が足に乗りかかり、父が来た時には足がトタンで深く切れていたらしい。津波は波が来る前にももの凄い風で、バリバリと家が倒され飛び交った。その後に波が来て、母の上にかぶさったトタン屋根がさらに足に食い込んだらしい。

家族のために、いったん家に戻り食料を持って逃げた母の行動を、戻らなければと思うと同時に家族の避難先での食料のことまで気を配った母の心根を思うと、やりきれない悲しさでいっぱいである。」（田畠ヨシさん、当時8才談、田老町史津波編、112）。

#### 4-3 避難路

避難路が整備されて居らず、そこで渋滞しての遭難が目立った。

唐丹本郷では、

「**本郷** 三方山で囲まれた稍廣い低地にあつた本部落は、僅かに一戸を余す他は全部流失、人口六百二十余のうち死者及び行方不明者合計二百二十七名を生じ凄惨を極めてゐる。地震と同時に津浪を豫想して早速高處に避難した人は勿論助かつたが、津浪に襲はれた人々は適當な避難路が少く遂に多數の人々が犠牲になつた様である。」（本多）。

「かすかに声を聞きし者、スワと飛び起きし時は、既に海岸の家屋倒壊し得るが如き、急に逃げし人皆大杉神社へ走る。

然るに道路狭く驚嘆の余り脚上げ得ず声出です。」（佐々木、18～19）。

「不幸、本郷は三百二十五名の多数の死者・・・・、何故に斯くの如く多数の死亡者を出せしか、その原因を探るに、本郷には明治二十九年の津浪遭遇者少なく、ために海岸に下りて警戒する者少なく、北村方面を除く外は大概平然として就床しあり、或は談笑しあり、津浪襲来間際に海岸の騒ぎに打ち驚き、或は海岸の家の破壊する音に驚き人々夢中に逃げ惑う者多く、常にこうした非常訓練に馴れざるため只高所高所と目差し、狭隘なる箇所にのみ皆寄せ、上り兼ね居る中に漂われたる者多く、最も避難に適せる県道伝いに走りし者の少なきは遺憾なり。」（佐々木、9～10）。

暗かったためもあり、また避難訓練もなされて居らず、ただ高所を目指した避難が遭難の原因であった。

田老でも避難路の不備が云われている。

「田老

非常時に際し避難すべき山地の遠き事、其山路の險惡にして登行に容易ならざる事本村より山手への道路少なく不便多き事尚當夜は激震と同時に電燈消えしも暫くして再び點燈せしに依り之が爲人心に幾分の安意を興へ再び就寝せしも今回の慘害を大ならしめたる所以にあらざるやと推意す。」と報告されている。（二宮）。

「扇田エイさん（当時小学5年生）談・・・・

津波の時一番最初に、母が弟を、兄が私を連れて赤沼山に避難した。避難する時は、赤沼川に沿って逃げた。郵便局と警察が向かい合っていた。郵便局を過ぎた辺りで、避難する人達が渋滞し始めていた。私達の前を丹前を着た男の人がのろのろと逃げていたが、両側に垣根があり追い越す事が出来なかつた。

そこで気を失い、山で気がついた。

母は、郵便局を過ぎた所で電気が消え、波にさらわれた。

避難する時、着物の裾をはさまれるような気がした。『離せ、離せ』と叫んだら、そのうちに軽くなった。履き物は、着物の裾を掴まれた時脱いだ。山に上ってホッと一息ついたら兄がいて、ちょっと経ったら母も來た。

親子で無事だったのでほっとした。」（田老町史津波編、74）。

#### 4-4 津波見物

被災はしなかったが、見物に出かける人は居た。

「大海嘯見聞記（5）船越と織笠村 後藤生

（船越）

寺の坊さんが地震直後桟橋までやってきて大槌に電話をかけて、返事をきいてから提灯をつけて寺に入るなり津浪がザーッと来たさうだ。寺は松原なので安全であったらしい。八角氏の説では船越にも浜に松原を作つて浜は共同作業場とし、山手に住宅を造るべきだといふのだった。三浦さん（医師三浦寅治）は、津浪ときくや、山に逃げずに人の止めるのを聞かずに坂を下つて行つた津浪の正体をつかまんと海の中を覗いて見たら、まっ白く逆まく波が恐ろしい音をして入海の処でうづまいてゐたといふ事だ。」（岩手日報昭和8年3月18日4面）。

大槌安渡の消防手は、

『呑氣と言へば呑氣、津浪だアー！！と言ふ叫び声で始めて起き上がったわけで……』彼、濱田重蔵消防手の家は安渡の山の手の安全区域にあるので人々はあはてふためいて避難して行つたが、自分は好気心も手伝つて態々浜辺の方へ下りて來た。

倉子屋のまえまで來て見ると、もう第一回の波が引けて行つた後で、地表をよく見ると一面に濡れていた。

『これが津浪と言ふものか。だったらあんなに悪声を張り上げて避難する迄もないな。今に「なあんだ」と、山から下りて来るさ』

其処に集つた五・六人の青年団の連中と『津浪恐るべきものにあらず』を話し合つてゐる処へ、地響をたてて、それはそれはなんとも言はれない無気味な音をたてて、家を倒し、流す、第二回の水が襲來した。

『それ！！ 大きいのがきたぞー！！』

忽ち、皆、夫々に避難した。彼も足駄を

はいたまま逃げた。』と一旦は逃げ切つたが、それから消防服に身を固め、救助に専念した。（大槌海嘯略誌、18-23、付録19）。

#### 4-5 肉親

「八 小友村

1. 只出浜に於ける津波襲來の概況 三月三日午前二時三十二分強震ありて部落民は明治二十九年の大海嘯の話など交しながら寝に就きたり、長宝丸水夫四五人鮫網に出漁すべく海岸に下り潮の遠く引きたるに驚き『それ津波だ』と叫びながら丘上に逃げのびたり、間一髪『豪々』ガラガラと家の倒壊する音『助けろ』『津波だ』と叫喚と悲鳴は各所より起り警鐘は乱打され忽ち阿鼻叫喚の巷と化し子供を助ける為母は浪に呑まれ老人を助ける為波に攫はれる等さながら生地獄そのまなりき、同部落の有志近藤勘四郎氏は一度屋外に出たるも老母を案じ背に負ひて駆け逃ぐる内に浪にのまれ行方不明となれり、家族の絶滅せるもの二戸なり』（気仙郡海嘩誌、7）。

「母を背負つたまま 犠牲となつた田野畠村長・・・・氏は村会の間まで役場所在地なる田野畠村平波沢に在り即ち村会の終れる二日氏の郷里なる平井賀に帰つて津浪に会つたのだ『津波だ！』と叫ぶ人々の声に飛び起きた氏は一旦戸外に逃げおくれたるを知り直ちに内に入り母を背負ひて逃れたのだった、この父にしてこの子あり氏の令嬢は灯をつけて父上の後に従つて氏をかばつた。この世にも美しき親子の愛情をもにくき波はかへり見ることなく一のみにのんでしまつたのだ、哀れ暁近く老ひし母上を負ひたるまま小田氏はむくろとなって汀にうちあげられてゐた令嬢もそのかたはらにむくろとなってうちあげられてゐたといふ。」（三陸大震災史、113）。

### 5. 漂流と生存

#### 5-1 樹木など

漂流中、樹木に抱きついて助かつた例、電柱や電線が命の綱となつた。

桑の木で助かったのに、  
「奇跡的命びろい 桑の樹に抱きついて  
助かった

▼・・・・・ 奇跡的な幸運者高橋鶴吉君は本年  
一月満州から凱旋した歩兵第四連隊第四連隊  
機関銃隊の出身

丁度あの時です、いえが持ち上げられたや  
うな気がしたのでぱっと起き出て雨戸を開けた時柱か何かで頭を打たれそのまま倒れた、  
その後どうなったか判らないがやっと気がついた時には浪に呑まれながら山際の桑の木に横腹をぶつけられて気がついたのだ、その瞬間桑の木に抱きついて離さず、それで助かったのです、

と頭と手に繻帶しながら語った。」(河北新報、昭和 8 年 3 月 5 日 6 面)。

同じく桑の木で助かったのに、  
「大海嘯見聞記 (7) 田老と小本港 後  
藤生・・・

小本・・・・・ カフェーの女給が、津浪といふ  
ので逃げ出したが浪がくる気配に桑の木に  
上ったものですそして、足袋一つ濡らさずに  
助かったといふ事でした。」(岩手日報、昭和  
8 年 3 月 21 日 4 面)。

電柱・電線も命の綱となった。  
「涙の挿話数々 田老 災害線を行く・・・  
六十余歳の老婆が電柱にしがみついて助かった。電柱は物凄い勢ひで倒れたが老婆は必死  
の力で電柱に抱きついてゐた。水が引いた時  
眼も口も砂でいっぱいだったが電線を伝はつて  
山ノ手の方へ逃げた」(岩手日報、昭和 8  
年 3 月 12 日 3 面)。

同じく電線に掴まったのは、  
「三沢村の惨状 西塚特派員 川合特派員・・・・・・・

津浪は第一回、第二回と段々に部落の方に押  
しよせて来たのであるが人々はそれとも知ら  
ずに眠ってゐたのである、それが第三回目の  
浪が陸上に猛然と襲ひ来った一瞬、家も人も  
この一撃の浪の為に跡方もなくさらはれて  
了つたもので、第二回の波をかぶつて胸迄の  
水を必死となって電線に縋つて辛うじて救は

れた尾崎と言ふ人もある。」(東奥日報、昭和  
8 年 3 月 4 日 3 面)。

松で名高い陸前高田では、  
「奇蹟と云ふもの 災害線を行く・・・  
気仙郡高田松原で小学校先生が寝てみると  
例のドシン!だ。何だか重たいものでミシミ  
シと部屋の壁に押しつけられる。水はどうど  
うと流れる。壁が破けて外へ出た何か知ら  
キッソリ抱きついてると水が引いて行つた。  
教員は二丈もある松の木のテッペンに捕まつて  
居たので降りる時大変難儀したさうだ。」  
(岩手日報、昭和 8 年 3 月 15 日、3 面)。

「十一 高田町 高田松原中なる浩養館(塩湯)  
に於て家族三名死亡、津波襲来と共に三名は  
波にのまれ即時死亡せらるらし、悲鳴も聞か  
ざれしと、當時止宿人は須知鉄雄氏(盛農學  
校卒業生) 鈴木米平氏の二氏なりき 須知鉄  
雄氏 当時を語る、左の如し、

地震後高田巡回派出所より異常なきかとの  
電話あり、その時は何等異常無かりき その後今迄聞え居たりし波の音はすと聞えずなりぬ、此は不思議氣味悪き晩と思ふ内黒屏風  
を立てたる如き大波(上は白く光れり) 押寄  
せ来れり、立って入口の戸を開ける時は大波  
は階段を猛然たる勢を以つて上り來り之が為  
入口の戸ははづれ此の戸によりて壁際に押  
付けられ家は傾き次第次第に押付けられ進退  
ここに谷まれり、その内に第二の波來り壁破  
れ外に逃げ屋根に飛び出づるを得たり、かく  
する内に次第に後方に流されたり、ややあり  
て松は屋根の木に近づきければ此は得たりと  
松の幹を伝り上り樹上に居ること約四十分位  
かくして助かるを得たりと。

県は製糸高田工場慰安所に宿泊中の夫妻も亦  
松の木に登り幸に助かれり、市街地は被害なし、  
日本百景の一なる高田松原によりて今回の  
災害より免がるを得たり、各罹災地より羨  
望の眼を以て見らるる所なり」(気仙郡海嘯誌,  
9)。

無意識のうちに衣服が絡まったのは、  
「之も亦命の親

地震ではね起きたけれども亦寝ようとした普代村の細越ミツ（20）さんは沖の方で雷鳴の様な音がするので吃驚して『津浪だ』と思ったときはもう死物狂ひに戸口を走り出たのであつたが、其の時は大波に足をさらはれて家と一緒に百間許りも畠地の方へ押し上げられてゐた。そして今度は物凄い引き波にさらはれて助かろうと藻搔いてゐると不思議にも波に残されてホットして我が身を顧みれば、腰巻が松の木に引っかってゐるのであつた。ミツさんに取りては腰巻は命の親だといふ訳でこれも一つの奇談だ。」（三陸沿岸大海嘯印象記、101）。

「子を抱いて夢中で逃げました（西塚特派員発）……松次郎の妻サツ（41）が……左の如く語った

……地震のアト、知らない中にどっと水が来たので地震の為に地面が割れて水が下の方から湧いて来たのかと思ふ間に一間程も高い水が寝室に入って來たので何が何だか訳が判らず夢中で子供一人を抱いて飛出した飛出すと直ぐ浪にさらわれたが幸に丹前が立木に引っからまって命丈は助かった」（東奥日報、昭和8年3月4日3面）。

### 5-2 流失家屋

「船越村田代忠平氏の祖母様は病床にありましたが、津浪襲来の報に家人が運搬しようとしましたが頑として聞き入れず、やむなくそのままとしましたが、家屋と共に流され、幸にも家屋の中は海水にも浸れず無事だったと言う。（船越尋常高等小学校編津浪襲来状況報告書）」（山田町津波誌、349）。

### 5-3 船舶

浜で出漁準備中では、  
「波の上で先づ煙草。

大槌町の漁師関谷亀蔵さん（60）は出漁の準備をしてみると間もなく津浪に襲はれ船はひっくり返ったが運よくズッボリと其の船をかぶってしまった。船が津浪にもまれて沖へ流されたり、磯へもどされたりする間爺さんは逆さになった船の中で『モウ駄目だ』とあ

きらめをつけ、好きな煙草でも飲んで往生しようと懐を探すと幸ひマッチもぬれずにあつたのでゆっくり煙草をふかして居た。暫くすると船は陸へ上げられて波は引いたので胴体を破つてノコノコと出て來た。」（三陸沿岸大海嘯印象記、98）。

浜に停泊中では、

#### 「二 海上における遭難の状況

浅根 小野寺 庄五郎（55才）述  
遭難船 春日丸（木造27屯 菅原長之助所有） 小野寺正太郎（22才）外四名

遭難の場所 大島村長崎

春日丸長崎浜に碇泊中地震直後潮の差引甚だしく、三、四〇貫の碇二丁を自由に引きながら湾内を数回回る中海水引去り船体傾斜したり。

其の後数分にして津波来たり。第二回目の波にて海岸五、六尺のところに打ち上げられ船体傾斜したる故乗組員は山手に逃げたり。船体大破に至らざるも相当に傾斜せり。引下げには村民総出動にて三日間作業に当り一週間ぶりに進水せり。」（大島誌、711-712）。

浜をやや離れた所で遭遇したのもある。

#### 「九 広田村……

泊浜部落に於ては強震後鮫網に出帆すべき漁船三隻に漁夫乗込み機関を運転して港を出るや急に異常の引潮となり津波襲来を予感し一隻は最大速力にて沖へ走り二隻は碇を巻いて進行せんとせしにその時は『豪々』『ざわざわ』と海鳴を生じ忽ち白波高く襲ひ寄せて来たり、乗組員は我が身の生死を忘れて『津波だ』と騒ぎ沖に出るも岸に上ることも不可能となり進退谷れり、此の時一隻の船は第一回の波に呑まれ岩上に打上げられ乗組員は波に飛び込み辛じて逃れ難を免れたり。船は第二回の波に呑まれて港に沈没し他の一隻の乗組員は魔の海に跳込み波浪にもまれながら、抜手を切って岸に泳ぎつきたるものの中二人の乗組員は死を覚悟し船体につかまり運を天に托し居る中に二百米許の地点に打ち上られて無事なるを得たと。」（気仙郡海嘯誌、7-8）。

浜からかなり離れた場所では、

### 「三 湾の中央における遭難状況

浦の浜 桜田 勇八 (38 才) 述

遭難船 観通丸 (26 吨 50 馬力石油発動機) 菅原徳三郎所有 村上米三郎外 13 名  
鮫網に出漁

遭難の場所 気仙沼湾

地震後 20 分経て大島浦の浜を出港する際は年寄の船員が大島村田中浜の方にて爆破の音響を聞き、其の後 15 分程にて大島村駒形浜沖に差しかかりたる際は船体急に動搖した。年寄りの船員が津波が来たから外に出てみろと言うので甲板に出てみると前方に白波の山がみて物凄い勢いで湾内に寄せて來たので津波と察した。

幸い大波をのり越えて船を廻し汽笛を鳴らして船員全部で津波来襲を叫んで浦の浜に帰港した。普通 15 分程のところを 7, 8 分で帰りすぐ上陸した。その時波に襲われて二人は腰までぬれてもう少しで流されるところだった。」(大島誌, 711-712)。

かなり沖で津波に遭ったのでは気付かない事が多い。

「釜石より外洋沖合出漁中の發動機船は急潮に會ひ難航したるも津浪なる事氣付かず歸港後に知りたる由、又其の當時將に出漁せんとして準備中なりし發動機船三艘は引き潮に依り津浪なる事を豫察し沖へ逃がれんとして運轉を開始したるも間に合ず港底に横倒れとなり其の儘第一回の激浪にて陸上へ持ち運ばれ船員は命からがら避難したと云ふ。」(辻)。

## 6. 直後の救援

### 6-1 陸上の救援

「激浪に飛込み 四名救助 三沢村の美談 海嘯襲来の騒ぎの中に三沢村四川目に自分の一身の危急を忘れ人命救助に当った美談がある、同部落月館栄三 (43) は副総代として、日頃村人から信望があるが当夜もスハ津波とかばかり人々が逃げ惑ふ中を家族の者に避難方を注意するや自分は帶もせず殆ど真裸で海

手に駆付け真暗闇に荒れ狂ふ一丈五尺余の怒濤の中に折返して三度も飛込み波間に漂ふ四名の者を救ひ出したが村人をはじめ三本木署でその勇敢なる行為を激賞し表彰方を上申する筈」(東奥日報、昭和 8 年 3 月 6 日 3 面)。

岩手県大槌でのことであるが

「此の夜、第五部詰めの警戒長、一等手三浦宗助氏及び他の四名は、海嘯襲来の兆と共に万全を期して町内の人々を逃して居たが、最後の人を逃してやると間もなく、目先き五間を隔てず最初の波は押寄せて、古澤徳松氏宅前まで来る。稍々汐の退け目を見定めて、之等消防手が大声を張り上げ、声のかずれるのも知らず、逃げ遅れた人々のために『出ろー！出ろー！』『今のうちに逃げろー！』と、叫びながら各所を駆けづり廻る。助けを呼ぶ声を聞いては、闇を突いて其の声を頼りに真一文字に跳ぶ。体は綿の様に疲れる。併し我等の使命は此処にある。斃れて後ち已むよりも、斃れて後ちなほ已ます、人命救助するを本懐として活動して居たが、中に見れば顔中を血だらけにし、ハアハア苦しげに空を仰いで、歩むことも出来ない土方三人あり、如何ともし難きままに、消防手二名にて之を安全地まで運びて、避難させた。又、澤館駒三氏宅前には泥酔者の如く、フラフラして立つことも出来ない者がある、見れば逃げ後れた土方二人、之には一名をつけてのがれさす。」このほかにも、道路に押し上げられた破船の陰から 14, 5 歳の娘、破壊家屋の屋根から 4, 50 歳の女性などを第二波、第三波にめげず、同僚と連携を保ちながら救い上げるなどと活躍している。(大槌海嘯略誌、18-23)。

近隣からも救いの手が差し伸べられた。田老村のことであるが、

「中島友吉さん (当時十七歳) 談・・・夜が明けないうちに、提灯つけて歩つた人がどうががあんだよ。『誰がどうがやつたべえ？津波に流れた人がやる訳でもねえ。』って思つてだった。後で聞いたっけえ、田舎のほう、

このあがりのほうの新田の人達が心配して來たんだと。」(田老町史津波編, 100)。

## 6-2 海上の救援

どうにもならなかったのは,  
「暗の中から助けて呉れ 唐丹村通過の船客の談

(釜石電話) 三日午前五時頃氣仙郡唐丹村小白浜沖を通過した三陸汽船の乗客の語る処によれば

同村本郷花露辺両部落には全く人家が見当らず暗夜の洋上から助けてくれとの絹を裂くやうな悲鳴が各所から聞こえたが波浪高くなんとも手の施しやうもなくただ見殺しにして同部落を通過した

と語っていた」(岩手日報, 昭和8年3月4日号外)。

そのように流されて居た人のうち, 4日後に救助されたのが,

「全部落全滅の災厄に会った岩手県氣仙郡唐丹村本郷は九十八戸のうち九十二戸百八棟流失し, 死者百名, 行方不明二百二十七名あるが, いまだ救いの手がのびないため七日は死体の運搬や家財道具の堀出しをなしているに過ぎない。七日同村の沖合二哩の地点につぶれた家が漂流しているのを人夫が発見小舟で近づいて打ち破って見ると人のうめき声がするので助けだした。これは三日の海嘯で死んだと思われていた唐丹村花露辺川原善吉(76)さん的一家六名で飢え寒さに瀕死の重態であったが死の一歩手前で救われうれしさに一同声をあげてほろほろ涙をこぼしていた。」(三陸大震災史, 106)。

水難救助で有名になったのは, 宮城県十五浜村(現雄勝町)大須の人々である。ここは明治三陸大津波の後で高所に全部移転して居たため, 今回は無被害であり, 隣部落の救助が可能であった。

「激浪を衝いて荒部落を救助 かくれたる大功労者 大須水難救護組合

十五浜村大海嘯の際, 隣接部落の惨禍を逸ち早く知つて救護に死力を尽し偉大な功を樹

てた部落がある, それは同村大須部落水難救護組合にして, 組合長阿部善助氏外十三名の組合は, 津浪襲来ときくや激浪を衝いて救助船を下ろし, 押流されて漂流中の部落民十三名を救助し, さらに死体三個を発見, 直ちにこれを引き揚げて安全地帯に送り届け, 手厚い救護をなし, 引続き波浪収まらぬ危険を冒し, 全組合員必死の勇を鼓して漂流物の捜査やら死体搜索に出動し, 同部落から小舟五十艘(見積価格五千七百円)を拾い上げ一般から非常に感謝されている。因に大須部落は太平洋にめんした荒磯地帯にして明治二十九年大海嘩の際両部落を一呑みにされたところにして, その後部落民申し合わせて, 全部高所に家屋を移転建築したため, 今度の惨害から完全に免れる事が出来たばかりか, 隣の荒部落に急援して素晴らしい活動をしたものであると。」(河北新報, 昭和8年3月11日, 8面)。

ただ数字には若干の差がある。荒の住人の話によれば救助されたのが十一人, その中の二人は凍死していた(付録20参照)。

田老でも漂流して居た人が助けられたが, 救助者の氏名は判っていない。

「箱石平三さん(当時30歳)の体験を長男富男さん談・・・・

津波の日, 父(平三さん)は海に出る時間帯だった。平三は一番下の弟である勇平の手を取って逃げた。煙があった垣根があった。垣根を乗り越える時, 第二波の波が来て勇平と離れた。そこで勇平を捜しているうちに, 波にのまれ流された。流される時, 石か岩か井戸が近くにあり, しがみついたが結局海に流された。

海中に漂っていたところ, 近くに大きな屋根が流れてきた。なんとかしてその屋根にしがみつき, 這い上がる事が出来た。・・・・

そのうちに, 誰か屋根のそばに流れてきた。『助けでけろー』と叫んだので『誰だー』と尋ねたら, 『松五郎だー』と言うので, 屋根の上に引っ張りあげた。・・・・

ずっと屋根の上に居るうちに, 救助の舟がやってきた。手漕ぎのサッパだった。そのサッ

パに助けられた。助けた人は誰だったか父に聞いていない。ただ、津波の被害に遭わなかつたのか、サッパは一隻だけでなく数隻が来て海上を搜索していた。

助けられたのは昼頃だったと思う。」(田老町史津波編, 115~116)。

### 6-3 直後の助け合い

「木村チヨさん（当時十一歳）談・・・・  
チヨさん 私の家から四軒目の佐々木幸太郎さんは昔の津波の話を聞いていて、これは大変だと思って松を束ねたのと鉈とマッチを持って赤沼山に逃げ、高い所に行ってからそれで火を燃やしていて、『さあ、あたれあたれ』と言って近くにあった薪をくべていた。着物が濡れていた人もいて、なんばか助かったもんだか。」(田老町史津波編, 166)。

「木村チヨさん（当時十一歳）談・・・・  
津波の朝は、足袋は履いていたが草履はなかった。避難した山から下りてきて、お寺の本堂のほうへ行ったら階段の上のほうで、田畠のおじいさんがこうりに下駄を一杯入れて、鼻緒をたてては履き物の無い人達に履かせていた。田畠のおじいさんは『チヨ子来い。下駄たててあげるから』と言って、赤い鼻緒をたててくれた。

田畠の家では、おじいさんが見えないと捜していたが、そのおじいさんがお寺の本堂の入口で、裸足の人達に下駄で鼻緒をたててくれているのを見つけて、安堵していた。」(田老町史津波編, 164~165)。

## 7. 電気の功罪

### 7-1 電気の功

地震後一時電気が消えてもまもなく点灯した。

釜石町では、

「七、釜石町は電燈消へず、津浪の來る時迄點燈してゐたので避難に都合がよかつた。」(本多・田島)。

田老では電気が一旦消えて又点灯した。田畠村では消えたままだったので提灯を持つて避難したらしい。

このように、夜間の避難では助かるものであった模様である。

### 7-2 電気の罪

釜石では

「次ぎは町の中央部、即ち場所前、只越及び大渡り通りの一部で倒壊又は流失の慘に加へて第四回目の津浪襲來し未だ海水の減退せざるに場所前外ニヶ所より發火し誰も消火に行く者無く燃ゆるが儘に委せ目抜の通りを一舐めとし津浪の憂が無くなりてより消火に務めしが時已に遅く百九十六戸焼失、午前八時半頃鎮火したる由、勿論發火場所及原因は現場に誰も居合せた者無く遠く裏山より望見したのみにて不明なる由」(辻)と記録されており、出火原因として漏電の疑いもある。

だからこそ、

「第五章 津浪被害予防法及び地震津浪に対する心得・・・・

一、屋内の火には灰をかけるか水を注ぐかして、その上に、鉄瓶・鍋釜でもかけて飛出すことを忘れるな。

一、電灯は安全器によって電流を遮断して、漏電による失火を防せげ」(大槌海嘯略誌, 70~73)とされたのである。

## 8. おわりに

人間は自分の都合の良いように思い込む癖がある。1970 年代後半、東海地震発生の危険が叫ばれた頃、三陸地方でも津波対策の見直しが始まった。その聞き取りの相手であつた村長さんとのエピソードを思い出す。その村の浜辺にはキャンプ場があつたが、スピーカーの一つもなかつた。「他所者に危急を告げる施設位なくては」と云うと、「貴方、何をおっしゃる。昔から夏には津波はないものと決まっている。あそこに人が来るのは夏だけだ。だからそんな物は要らないんです。」と真顔で叱られた。

何時になっても、この種の思い込みはなくならないのだろうか。

昭和三陸大津波来中の、消防団員や隣人の、波をかきわけての救命作業には頭が下がる。「津波でんでんこ」を基本とする現在、こうした行動に出ようとする人々に如何に忠告すれば良いのか、迷うばかりである。

## 引用論文

- 1) 青森測候所 (1933) : 昭和八年三月 3 日地震津浪調査報告 (其の一) および (其の二), 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 219-238。
- 2) 石巻測候所, 宮城県下津浪踏査概要報告, 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 205-216。
- 3) 岩手県上閉伊郡大槌尋常高等小学校・大槌水産専修学校・大槌実科高等女学校 (1933) : 昭和八年三月三日 大槌海嘯略誌, 全 73 頁。
- 4) 岩手県立盛農学校 (1933) : 昭和八年三月三日 気仙郡海嘯誌, 本文 30 頁, 付録 4 頁。
- 5) 大垣春吉 (1933) : 三陸沿岸大海嘯印象記, 全 179 頁。
- 6) 大島誌郷土誌刊行委員会 (1982) : 大島誌, 全 989 頁。
- 7) 釜石尋常高等小学校郷土研究部 (1933) : 昭和八年三月三日 三陸大海嘯記録, 全 63 頁。
- 8) 国富信一, 竹花峰夫 (1933) : 三陸沖強震及津浪に就いて, 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 127-129。
- 9) 鶴坂清信 (1933) : 牡鹿半島沿岸踏査報告, 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 136-145。
- 10) 佐々木典夫編 (1982) : 津波の記録／昭和 8 年の三陸津波, 48 頁。
- 11) 三陸大震災史刊行会 (1933) : 三陸大震災史, 全 185 頁。
- 12) 辻芳彦 (1933) : 三陸沖強震津浪踏査報告, 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 176-182。

- 13) 二宮三郎 (1933) : 山田町田老村方面災害踏査報告, 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 183-186。
- 14) 古館金藏 (1933) : 三陸沖強震津浪踏査報告 (気仙郡), 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 167-172。
- 15) 本多弘吉, 田島節夫 (1933) : 岩手県下踏査報告, 駿震時報, 第 7 卷第 2 号別冊, 中央気象台, 130-135。
- 16) 山口弥一郎 (1943) : 津浪と村, 恒春閣書房, 全 212 頁。
- 17) 山田町津波誌編集委員会 (1982) : 山田町津波誌, 全 842 頁。.

## 付録 参考原文集

### (付録 1)

#### 「釜石町

八、海岸の低地（スカ）に住居してゐた人々のうち、特に他國から來た人は津浪の経験がなかつた爲逃げおくれた人が多い。」（本多弘吉、田島節夫）

### (付録 2)

#### 岩手県唐丹本郷

「つい先の明治二十九年にあの大惨害に遭ひながら、どうしてもっと秩序立った避難方法を講じなかつたらうかと言ふ事である。然しそれは先述した如く、先の津浪は余りに災害が甚だしかった為に、この村の生存者は十五、六人しかなかった。釜石の北の鵜住居村両石等でも言はれてゐる如く、結局は本郷でも津浪未体験の他所者の集りで再興した村に過ぎなかつた。それであるから津浪来襲の事情は、実は物語として伝へ聞いてゐるに過ぎず、それは哀話のみ多くて正確な地震と津浪との時間的関係の要所を、指摘して語り伝へる事をしなかつたものと思はれる。」（山口弥一郎、津浪と村, 52 ~ 53）

### (付録 3)

#### 岩手県姉吉

「姉吉はもとより十二戸位の漁村に過ぎな

かつたらしいが、明治二十九年には全戸流失と共に、生存者はただ二人で、全部死去或は行方不明と言ふ惨害にあった。であるから復興にも村人よりは人を得られず、何れも隣村等から若い人々が相続者に見立てられて継いだので、津浪の経験者がなく、原地の浜に仮屋を建てて住む者が多かったらしい。ただ数戸は千米程奥の、標高約六十米の山崎に移った跡があるが、一戸は後に北海道へ移り、他の家も大正十三年まで止まってゐたが遂に元屋敷に戻って、昭和八年にはこの移転地に一戸も残ってみなかつた。この詳細な事情は生存者が全くないので聞くにも困難であるが、『姉吉は全部移って全部戻って、又流された』等言はれる如く、千米の坂道を浜に出て、漁獲物を持ち上げ、時には夜道を、女、子供等通ふ事は到底堪へられず、一戸が元屋敷に居着くか、戻るやうになれば、津浪の経験をもたぬ移入者のみにより再興された部落は、経済的関係のみにひきづられて原地に復興するものと察しられる。」(山口弥一郎、津浪と村、196～197)

#### (付録 4)

「荒 外洋に面するために被害特に著しく死者二十四名、行衛不明三十五名、負傷者三十八名を出してゐる。同部落では地震後一度外へ飛び出ましたが、地震が強ければ津浪はないものと誤認してかかる多數の死傷者を出した由である。浪の高さは極めて高く約三十尺である。」(国富信一・竹花峰夫)

#### (付録 5)

「(3) 名振 津浪の來たのは地震後四十分で、其の高さは一丈四尺(四・二メートル)である、明治二十九年の時より三四尺も高いとの事である。三回程強いのがあって第二回目が最大だといふものも、第三回が最大だといふ者もあって定まらないとの事であるが、然し筆者の直接聞いた津浪の體験者の永沼氏及び阿部氏等の談によれば最初知つた津浪が最大であつたといふ。

津浪の周期は五分位であらうとの事である、

その寄せて来る様は船越と同様比較的静かにザワザワと高まつて来るといふ。光や音は筆者が直接聞いた三四人のものは認めないとの事であるが此の村落にも幾人かは光を見、音を聞いたといふ者もあるといふ。地震で津浪に注意はしたが此の前のとき(明治二十九年の津浪)は地震後三十分で來たのであるが今度は來ぬからといって皆寝た所を襲來した。

(鷺坂清信)

#### (付録 6)

(6) 雄勝 津浪の高さは灣の奥の方面(小學校附近)では一丈五尺(四・五メートル)であるが街の中央部(役場附近)では一丈二尺位である。その來た時刻は地震後三十五分乃至四十秀位で強勢のものは三回であったが、其の最初のものが最大だといふものも二番目が最大だといふものもある。

音は二回程聞いたといふものも全々聞かなかつたといふものもあつた。發光現象としては東方に稻妻のやうなものを認たといふものもあつた。

次に此處の小學校は明治二十九年の時の津浪を標準にして建築したものであつて、今後津浪があつても校庭迄は上らないだらうとの見込であつたが、今回は校庭の上へ四尺も昇つて二三十噸もある船が押し上げられた。

此の村落では地震によって津浪を豫測し高所に避難して居つたため多數の流失家屋があつたのに反して僅かに九人の死者を出したのみである。此處に注意すべき一つの話しがある、即ち某家では明治二十九年の津浪の時に逃げたため、其の際小供を浪に奪はれた、其處で今度は逃げない事にして家に居つた處が家ごと流された、其の家に居つた人達の中、泳ぎの出来る二人の男は助かる事が出来、又泳ぎの出来ない一人の支那人は屋根を破つて救助を求めて居つたが遂に助けられた、他のものは皆死んで仕舞つた。雄勝での死者は殆んど全部が此の家に居つた者であるといふ。

(鷺坂清信)

## (付録 7)

「泊

此處で二三人より聞いた當時の模様を綜合して見るに第一回の地震（此處でも時計が止つた程度で棚の物も殆んど落ちたものがなかつたさうである。只一軒棚の瓶が倒れたとの話があつただけである。震度としては矢張り此の邊も四程度で緩慢な長震動であつたろうと思はれる。）があつてから約十五分後第二回目の余震を感じたさうだ。その時海面に注意して居つた人の話に依ると地震後約十分位にして潮の減退があつたさうである。その爲過ぎし明治二十九年の津浪の経験者は津浪の襲來を豫言して警告をしたため大部分の人々は早く避難する事が出來たさうである、第一回の波浪の襲來は地震後約三十分位で其の後續いて第二第三の波浪（第二回の波は一番高く約十五尺位）の襲來がありその爲大部分の家屋は第二回目の波浪に依つて倒潰され綺麗に流失されて居る。此の部落の人々は地震の爲一時戸外に跳出したさうであるが其後何れも大した事はなかつた爲再び家に入り床に就いた人が多かつた様である。津浪襲來の警告を聞いても起きないで遂にそのまま死んだ人が三名もあるとの事であつた 此邊では昨年頃より津浪が来ると言ふ事が頻りに言ひ傳へられて居つたので地震ある毎に警戒をして居つたさうであるが中には何時もの事の様に思つて油斷して居つたものも少なくなかつた様である。（古館金藏：三陸沖強震津波踏査報告（気仙郡），駿震時報，第7卷第2号別冊，中央気象台，167-172）

## (付録 8)

**(5) 鮫の浦** 鮫の浦の口幅は僅かに五十間程（口繪寫眞第五圖参照）であつて津浪は澤に沿ふて五丁も奥へ突進した、而して寫眞に向つて右側の山麓の住家十一戸を流出し、死者三十六名を出した。津浪の高さは一丈六尺（四・八米）で、來た時刻は地震後四十二分であつて、最初が最も強く、次は五尺さがり、更に三尺さがりと漸次其の高さを減じ七八回程襲來した。

地震では被害はなかつたが之に依つて津浪の襲來を用心して居つた者は子供迄も助かつたが、寒い時には津浪は來ないと考へ油斷して居つた者が多く流されたと村の方々は語つて居た。（鷺坂清信）

## (付録 9)

**追波湾** **(1) 船越** 津浪は地震後三十五分に襲來し其の高さは一丈五尺（四・五米）で明治二十九年の時より三尺程高い、その週期は五分位だといつて居る人が多い、又三回程強勢のがあつたが第二回目が最大だといふものも、第三回だといふものもあつて一定しない。地震では建築物には少しの被害もなく棚のものさへ落ちなかつたが、只餘りに長く震動してゐたから或は津浪の前兆かと一度は多くの者が高所へ逃げたのであるが中々津浪は來ない、又寒い時には津浪は來ないと考へをもつて居るものがあつて逃げたものの中三分の一一位家へかへつて仕舞つた、間もなく津浪が襲來し、其の人達は水にぬれて、第一の波の引けるのを待つて逃げる事が出來た。（口繪寫眞第十三圖参照）

津浪の寄せて來る有様は比較的静かなざわざわと音を立てて海が高まつて來るのであるといふ。（鷺坂清信）

## (付録 10)

青森県二川目

二川目。（松尾石造氏談）地震々動中南方の空に映光ありて西へ靡きたる様見受けられたり、又南方にあたりて遠方の爆發する如き音響を五六回聞きたるが警戒のため川に下りて見るに二尺位増水せる跡雪上にあり第一回の波跡と思惟したるが時刻は地震後三十分位にて後「ジャージヤー」第二回の波が前よりも少しく高く來り十五分後に第三回目の最大波來り二十九年に浪の爲柱の折れし被害家屋（木村吉三郎氏宅）に三尺浸水ありたるのみなり。海嘯は波高は約十尺と推定せり。河水は七八尺の増水ありたり。尚河水を警戒中二回目の浪の襲來を認め半鐘を打ちて部落を警戒し濱邊に下ることを禁じた爲め人畜の被害

皆無となれり。（青森測候所）

（付録 11）

**（11）相川** 津浪高さは一丈六尺（四・八米）であつて明治二十九年の時より高いといふ者も低いといふ者もあつて一定しないが大體に於いて同一程度であらう。津浪の襲来時刻は地震後約三十分で、三回強勢のものがあつた中、第二回が最も大きかつた。一般に津浪の来る事は地震によつて豫期せられた故、四十戸の流失家屋に對して僅かに一人の死者を出したのみである。然しながら此處に特記すべき殊勲者がある、河部倉松氏は「斯の様な地震の際は津浪来るかも知れないから海岸へ行つて見て居る、若し俺が大聲を立てたら津浪の知らせだから逃げろ」と家のものに注意して海邊へ行つた。所が潮が四、五十間も引いて、やがて津浪が押し寄せて來るのが見へた、其處で大聲を發したため、豫め注意して居た人々は急いで逃げて、難を免かれたものも可なりあつたとの事である。（鷺坂清信）

（付録 12）

只出

「地震は實に強く且長く五分一八分間位も震動して居つたが地震直後大砲でも打つた時の様な大きな音が聞こえ、それより約十五分か二十分位後何んとも言はれない物凄い音を立てて第一回の波浪がやつて來たが、波の高さは割合に小さく其の次にやつて來た波は大きく約十尺以上もあつたそうである、第一回の波の來る前に平常より約十六尺-二十尺位の距離まで退潮しその爲め大低の人々は津浪の襲来を豫知して警戒して居つたさうである」

（古館金藏）

（付録 13）

「気仙沼署管内

海嘯襲来の状況 三月三日午前二時三十分頃強震あり為に何れも起床屋外に飛び出したが、後約三十分位で沖合に大砲を發射したような音響二回あり、其後海面干潮間もなく海嘯襲來した。去る明治二十九年の海嘯の際にも沖

合に於いて音響後一時に干潮となつた例があるので、之を知る者は直ちに海水に注意したが果たして海水が引いたので海嘯の来る事を予期し部落民に急告した為比較的死傷者少なかりし模様。

各地被害の惨状

小泉村二十一浜部落総戸数四十三戸の中流失家屋十一戸全潰一半潰にして死傷八名、行方不明者七名、馬匹斃死三頭、半全潰の家屋二棟は形態を存す留も、其の他は約二丁位小川に沿うて上流に押し流されて大破した。同部落に死傷少なかったのは地震直後出漁全部の為、海岸に居た漁夫が早くも海嘯襲來を知り部落民に知らせた結果である。・・・・

唐桑村字小鯖浦部部落総戸数六十三戸中流失家屋二十九戸、浸水家屋十戸、死者八名、行方不明者七名、負傷二名、同所には大洋丸（80頓）不動丸（63頓）松生丸（40頓）の三艘が海岸に押し上げられ、家屋の破片は湾内に充満し殆ど海面と陸地とを區別し得ざる惨状を呈した。

同部落民中強震後間もなく一時に干潮になり海嘯の前兆なることを知り、小高き丘に上がり部落民に津浪だ津浪だと告げたが火事と間違ひ逃げおくれ死傷したものもある（三陸大震災史、36～39）

（付録 14）

釜石町

一、地震の振動時間が長く不安を感じた、明治二十九年の津浪の経験ある此の地方の人々のうち、若干名は海岸に出て海水の模様に注意してゐた所急に海水が干き始めたので驚いて逃げた。（本多弘吉）

（付録 15）

**（13）大指** 津浪の高さは一丈六尺（四・八米）で、地震後四十分程經て襲來した。雷光のやうな光りと共に大砲の響のやうな音を津浪の直前に聞いたといふ、又津浪の週期は約十分位である。尚津浪の高さは明治二十九年の時より四五尺低いといふ者も同じ程度だといふ者もあつた。次に遠藤政高氏の語る所を

記す「地震が強かつたから津浪の襲來を案じてゐた折から、非常に烈しい音がしたから海邊へ行つて見ると、其の音は水が引けるため船と船とが衝突し合ふためであつた、そして海水は海邊から六七十尺（沿道の深さで言へば一丈乃至一丈五尺）も引いて仕舞つた。之は津浪の前兆と察し、家へかへり子供を起して上の道路まで連れて上るや否や、背後で何とも例へやうのない物凄い音がした、見れば已に長さ十四間もある納屋其の他數棟が押し流されてゐるのであつた。其の間僅かに五分であつた」と云ふ。又それが最初の津浪で最強のものであつて、後から二回程強いのが來たが勢力は次第に減少してゐた。尚又夜明（六時半頃）一回幾分大きいものがあつたといふ（口繪寫眞第十四圖参照）（鷺坂清信）

#### （付録 16）

広田村役場「地震後約五分位にして約五丁程の潮の減退を見それより約二十五分位後第一回の波浪の襲來があつた。更に又二三分位後第二回の波浪の襲來があつた。此の波浪の爲に家屋の倒潰漁船の破損流失等は一瞬の間の出来事である。其邊の大部分の人々は地震後の潮の減退を見て津浪の襲來を豫察し高處に避難したさうである。（古館金藏）

#### （付録 17）

##### 市川村

本村中被害を蒙りしは橋向と稱する五戸川南岸低地に存在する家屋納屋等にして被害者（佐藤福太郎氏）の談に依れば二時三十分床下にて「ムクムク」するが如き強震ありたるを以て明治二十九年津浪の時の地震と略ぼ同じ感じをしたるが故に津浪の來襲を豫感し直に老婦幼兒を小丘に避難せしめ自分は海面を監視し居りたるに三十分後異常音響を伴ひて北東方より津浪襲來し最高潮なるは約一時間後にして津浪の襲來する尖端白色となりて海面は可なり明るくなり「シヤシヤシヤ」と音を發し物凄き由なり。尚本人は第三回最高潮を見届けて避難したるも波足早く辛うじて助かりし位にして、此の時の潮高は三丈ありと

言ふも之れは全く驚愕の餘り過大に見積りたるものにして砂洲（スカ）の冠水より目測するに三米内外のものと認めらる此部落は二十九年には海岸より五百米位海水押し上り浸水戸數多大なりしも今日は前者に比すれば著しく劣勢なりしものの如し。（青森測候所）

#### （付録 18）

二川目。此度の地震は上下動を感じ床上の震動は少く床下のみ烈しく宛ら床上へ浸水し「ムクムク」するが如き感ありたれば局長夫人は前回津浪の時の地震と同じく思ひ直に津浪を豫知し局長に依頼し二川橋上に於て海面を監視し重要書類の整理貴重家財の運搬等避難準備をなし隣人をも促し夫々避難準備をすすめたり。一方局長は井戸内を視たるも暗夜の爲め其變化を認めず、二川河水は三種餘減水を見尚ほ引瀬と共に北方より異常音を聞く（尚地震と共に南より西の方の陸地方に電光の如き光を見たりと言ふも之れは其後直に停電したるより見て「ショウト」したる時の火花ならんと思はる。第一回高潮は地震後約三十分位第二回は時刻不明（第三回は地震後約一時間）位にして潮高は約四米位と思はれ物凄き何とも形容出來ざる、音響を伴ひ津浪の尖端は白光となつて折れ返り二川川筋に沿ふて北東方より來襲す、前回津浪の潮高に比して今回のものは約一米半低し本部落に於ては第二回津浪襲來前警鐘を剛打し既に避難したるを以て人畜に些少の被害を見ず。（區長木村吉三郎氏郵便取扱局長松尾石藏氏及同夫人談）（青森測候所）

#### （付録 19）

『呑気と言へば呑気、津浪だア！！と言ふ叫び声で始めて起き上がったわけで……』彼、濱田重蔵消防手の家は安渡の山の手の安全区域にあるので人々はあはてふためいて避難して行ったが、自分は好気心も手伝って態々浜辺の方へ下りて來た。

倉子屋のまえまで來て見ると、もう第一回の波が引けて行った後で、地表をよく見ると一面に濡れていた。

『これが津浪と言ふものか。だったらあんなに悪声を張り上げて避難する迄もないな。今に「なあんだ」と、山から下りて来るさ』

其処に集った五・六人の青年団の連中と『津浪恐るべきものにあらず』を話し合っている処へ、地響をたてて、それはそれはなんとも言はれない無気味な音をたてて、家を倒し、流す、第二回の水が襲来した。

『それ！！ 大きいのがきたぞー！！』

忽ち、皆、夫々に避難した。彼も足駄をはいたまま逃げた。が、あの水では相当な被害がある。人命にも大きな影響があるに相違ないと思はれたので、こんどは消防服に身を固め、長靴をはいて出て来て見れば、阿部勘五郎氏も懷中電燈を持って出て来た。電光で其の邊を照らして見れば、慘たる状況は全く朝と同じで、建設したばかりの第三部の消防屯所は、そのまま流されて向側に突き当り、裏側の家々はみな押しまくられて、町の道路と浜辺との道路を完全に遮断して終っていた。

『助けろー！！助けろー！！』

男の声、女の声が入り交って、それ等の倒潰家屋を越して浜辺から響いて来た。

それッとばかり、屋根を跳越え二人は水を越え越え（此の時はまだ一尺ばかり残って居た）声のする方に行って電光で見れば、家内中二階に避難したまま流された、松村春治一家であった。二人は夫々背負ひ又は手を引いて、現在どの方向に流されて来ているやら皆目わからない、之等の人々を里館弥兵衛宅まで運び、屋根上の他の連絡員に渡して安全地帯に運んだ。すると再び同一方向より、助けを求める声が聞えて来た。行って見れば、前記の場所より十間程沖合の倒潰家屋の廻の下で、裸のままの子供三人が、ふるひ乍ら父親に縋りつき、父親は又離すまいとしつかり抱いていた。

此の父親—三人の子供を殺すまいと、両手で差し上げて、水から逃れさせ、或は頸にのせかかえては水より離してこれ迄来た。そのさまは直視の出来ない哀れな状態である。一間も置かず、阿部は一人の子供を、彼は二人の子供を奪ひ取らうとすれば、父親何を

思ったか、離すまいとした。

『大丈夫だ。俺等は此の子供達は必らず助けてやる。安心して渡せ』と。

元気をつけて之を離し取り、そのまま安全地まで走った。勿論父親も後からついて來たものと思った。そして、三人の子供を連絡員に渡して之を救助した。此の家族はもう一人子供の救助されたのがある。それは第一回の波に既に流されつつ居たのを、我が子を探しに出た、前川三郎氏に救助されて居る。が併し外に六名の犠牲者を出した程の不幸な家族である。

三度救助を求める哀れな声が聞えて来た。電光を便りに浜辺に突き進めば、二渡神社の高処から、

『津浪ア一 来たア一！！ 逃げろー！！』

早く逃げろー！！』

と叫び、わめかれた。電光を持った阿部は躊躇したが、彼は単身、尚ほ浜辺に進んだ。と、前記の三人の子供の父親一里館太郎が先きに一所に走れなかつたと見え、前の場所から流された佐藤慶蔵氏の納屋の処まで、僅かに約十間もはって来て居た。此の姿を見せられた時、思はず全身に水をかぶせられたやうな恐ろしさを感じた。その瞬間逃げんとまでした。

山から一生懸命に

『逃げろー 水ア一 来たゾー 逃げろー！！』と警戒の叫びが聞えて来る。然し、断然此の人を助けようと決心して近づけば、はって来て、いきなり『ガッチャリ』と、つかまつた。背中を向けて『おぶされ』と、言つたが、何分腰が抜けているのでつかまれない。

山では山で、浜辺にいるらしい人達に警戒する為に叫ぶ、騒ぐ。

『早く逃げろー！！ 津浪ア一 来たア一！！』

無我夢中で、此の男をかついた。海なりが激しい。尚、第三度目が襲来して來たかも知れない。暗い道路に非ざる地表を走つた。そして安全地に到達して此の大の男を他の連絡員に手渡した時、自分の心と体が一時にゆるんで終つた。

その後夜明け迄安渡全体に向つて人命救助、

負傷者の手当等孔々として尽した。」（大槌海嘯略誌、18-23）

(付録 20)

「神も仏もないと云う荒部落

浸水家屋五百、流失倒壊百余、死亡行方不明  
七十を数えられる同村（注：十五浜村）荒部落は二十八戸の中十八戸、その家族十七名が浪にさらわれている。・・・・・・荒部落の高橋梅吉氏の宅を訪れて見た。・・・・

主人の梅吉氏は・・・・尚語をついで

明治二十九年の津浪のときはこの部落は十六戸でそのうち八戸流され二十八人死んだ。そのとき津浪の高さは十九尺五寸と調査されたので私共はこの程度なら大丈夫だろうと海岸を離れて家を建てました。ところが、今朝の浪は三十五尺からあった。それがさほどの音もなく地震後三十分位かと思う頃、ただの一通でやって来たのですからたまりません。御覧の通りです。私の家には重傷の人が六人です尚縁側には七つの仏さんがいます。一家族全部亡くなられたのは高橋松男家の八人高橋貞二郎、高橋しんの各四人の三家族です。海に流された人

でも運よく隣の大須賀の船に十一人助けられたが、その中二人は凍死していました。・・・・云々」（三陸大震災史、24～26頁）

(付録 21)

箱石哲平さん（当時小学6年生）談より

「●津波に対する日頃の注意っていうか、親はどんな事喋ってました？明治二十九年の教訓というかは？」

箱石さん 別にねえ・・・ただ、枕元には懐中電灯をねえ。これは最近の習慣ですかねえ。当時は無かったから。

●蠟燭でした？

箱石さん 蠟燭で。ただ、津波の頃は電気が点いてましたねえ。一旦消えてまた点いたらんですよ、私の記憶では。

●昔は提灯もって逃げたっていう。田野畑のオオサワユザブロウ先生の話では、避難する時に提灯の灯が見えてたら波が頭から來たっていう。

箱石さん そうそうそう。向こうは電気の点くのが遅かったから。我々のほうはなんぼか早かった。」（田老町史津波編、70）